「告白は突然」だったのか

陣立昌之

それは2019年12月22日のことだった。熊本聖書フォーラム集会でのクリスマス聖餐式の直前に、「福音の3要素を信じますか」と尋ねられた私は、自分でも驚くほど素直に「はい」と答えていた。妻をはじめ周囲の皆さんに祝福されながら、「そういえば、来る途中で立ち寄ったJA直売所のパンコーナーで『種なしパンて、美味しいのかな』なんて、脈絡なく頭に浮かんで来た」と、改めて導きの不思議を感じていた。

一向一揆の国・石川県出身だった祖母（父方）の影響で、私は幼い頃から浄土真宗に親しんできた。「親しんできた」というレベルも通常の日本人的な葬式仏教だけにとどまらず、祖母たちが詠む朝夕の経を聞き覚え、小学生の頃ぐらいまでは親鸞聖人の忌日法要には寺について行かされ僧侶の説教も聞いてい

20×20

た。今でも在家の勤行ぐらいならできる。「罪がある（と自覚する）悪人（凡夫）こそ往生できる」との考え方には慣れていたし、共感も覚えていた。12年前に最初の飼い犬を亡くした時に、その悼みを書いた記者コラムにも、「朝（あした）に紅顔、夕べに白骨」という蓮如上人の「白骨の御文章」を世の無常を表現するために引用した。

高校（真宗ではないが浄土宗系の学校で毎朝、合掌し「誓いの言葉」的なものを唱えていた）の同級生である妻と夫婦となったことで、私の回心の歯車が回り始めたのだ、と今となっては思う。妻は交際している時から、聖書の神の話を頻繁に語り、それについて、私が意見を述べて争ったこともあった。先述の犬も、妻が愛護団体から引き継いできた「彼」を「イサク」と命名し、その名の意味を教えてくれた。息子も含めて3人でかわいがっていたが、「彼」は半年で急死。私がペットロスに耐えかね直後に飼ったメス犬（現在

20×20

の愛犬）にも、妻は「リベカ」と名付け、井戸のエピソードを教えてくれた。「カインとアベル」「エサウとヤコブ」の話などは、私が次男であることもあり、興味深く聞いた。その他にも妻自身が受洗した時の話や、乳がんの切除後に「無治療」を選択した時にも聖書の中の言葉を用いて、その気持ちを伝えてくれた。妻が意図していたかどうかは別にして、聖書的な世界をわが家に持ち込み、それについて話すことで、真理と私との距離をだんだん縮めていってくれたのだと思う。予言と預言の違いも分からず、「その方を信じれば救ってくれるのならば、呼ぶ名が『阿弥陀さま』でもいいんじゃないの」などと言う私に、よく根気強く話してくれたと感謝している。

信仰告白をする以前から、私の中で少しずつ何かが変わっていることは自分でも感じていた。フォーラムの冒頭に毎回、賛美をするが、「十字架のかげに」や「鹿のように」な

20×20

ど初めて歌った時に自然と涙が出た。これらは妻が以前からよく口ずさんでおり、節も聞き知っていた歌ではあったのだが、その不思議を話すと、妻は「そんな時は聖霊様が来たっていうのよ」と微笑んでくれた。昨秋に仕事上でトラブルがありクレームに対応していた時は「すべては主の御手にあり　明日も生きよう　主がおられる」と社内の廊下を歩きながら口ずさんでいた。12月22日の突然の告白に妻は心の底から驚いていたが、私にとっては長い働きかけ（おそらく神からの）を受けた結果だったのだと思う。「真理なる方と自分はつながっている」と思えているからなのか、現在の新型コロナウイルス関連で二転三転する仕事の状況にも、平常心を失わずに対応できているような気がしている。何より、自宅で聖書を読み（或いはフォーラムや準備会で学び）、妻と会話することが以前に増して楽しくなった。

「いつもと同じ社内だけど、何となく気分

が違う不思議な感じ」。「告白」した翌日の23日、妻にＬＩＮＥした言葉だ。単純に生まれ変わったような気がして、その喜びを素直に送ったのだが、その後も新たに学ぶことばかりで、「自分は何も知らない」ということを改めて突きつけられ続けている。「神はご計画を進めるためにも、私たちの祈りを用いてくださる」とは、自分の人生を主体的に生きることにつながるし、さらに、先日の準備会の学びでは、「自分が選んだつもりだったけど、ここまで導かれていたのだ」ということにまで気付かされた。これからも「主を信頼する」ことを通して、選び取られた誉れを自らおろそかにする「選民意識」にも、「所詮はご計画の通りになる」という「神任せな厭世趣味」にも陥らず、狭い尾根道かもしれないが妻とともに一歩ずつ「恵みの高き嶺」へと進んでいきたい。

20×20